



Kobe Shoin Women's University Repository

KARASHI-DANE

『NANA』、あるいは引き裂かれる母と子の物語 : 少女マンガと母性の問題

| | |
|------|---|
| 著者 | 打田 素之 |
| 著者別名 | UCHIDA Motoyuki |
| 雑誌名 | 研究紀要. 人文科学・自然科学篇 |
| 巻 | 51 |
| ページ | 59-71 |
| 発行年 | 2010-03-03 |
| URL | http://doi.org/10.14946/00001562 |



『NANA』、 あるいは引き裂かれる母と子の物語 —— 少女マンガと母性の問題 ——

打 田 素 之

1. 引き裂かれる子供たち

月刊誌「クッキー」（集英社）誌上に連載中の『NANA』（矢沢あい作、1999年～）は、音楽メディアの世界において成功をおさめる二つのロック・バンドのメンバーたちの物語である。この作品は少女マンガでありながら、シンデレラ・ストーリーの拒否¹、性的な場面や会話の頻出、ヒロイン・奈々の妊娠など、いわゆる「正統派」の少女マンガには在り有べからざる要素がいくつも存在している。しかし、こうした過激な要素のみが、この作品を特徴づけているわけではない。と言うのも、『NANA』は、親を欠いた家庭に出自をもつ子供達が多数登場する、母と子の関係をテーマとした物語だからである。

たとえば、もう一人のヒロイン、大崎ナナは、少女時代に母親に捨てられ（図版1、第16巻p.144）、祖母に育てられた存在である。未婚の母から生まれた彼女に父親の記憶はない。彼女は高校中退後、パンク・ロックの世界に入り、ブラックストーンズ（以下ブラスト）のヴォーカルとして活躍している。彼女の恋人、レンは、もう一つのロック・バンド、トラップネスト（以下、トラネス）のベーシストで、幼児の頃に港の倉庫に捨てられ、15歳まで孤児院で過ごしている。レンの友人、ヤス（ブラストのドラマー）は、両親を幼くして交通事故で亡くし、

拙論は、昨年『研究紀要』第50号（神戸松蔭女子学院大学学術研究会発行）に発表した《*Nana ou une histoire du déchirement — Shôjyo-manga et problème de la maternité*》を翻訳し、それに加筆したものである。

- 1 ナナのタクミとの結婚は、もちろんシンデレラ・ストーリーの成就であるが、この作品の物語の中心となるのは、ナナとレンの恋の顛末である。
- 2 矢沢あい『NANA』（集英社リボン・マスケット・コミックス、2000年～）。コミックスは2010年1月現在、21巻まで刊行されている。



図版1 「ナナと母との別れ」

(© Yazawa Manga Seisakusyo / Cookie SHUEISHA Inc.)

その後は養父母に引き取られている。トラネスのリーダー、タクミは一応両親のそろった家庭の出身だが、父親は酒浸りの暴力的な男で、家族にかまうことを知らない男である。その苦勞からか、タクミの母親は彼が高3のときに病死している。

もちろん、『NANA』にはナオキ（トラネスのドラマー）やノブオ（ブラストのギタリスト）のように普通に両親が存在する家庭の出身者もいるが、この作品には不幸な少年・少女時代を過ごした若者が余りにも多いのである。他にも、トラネスの歌姫、レイラは6歳の時に父親を亡くしているし、ブラストのベーシストであるシンの母親は、彼が生まれると同時に自殺したとされる。シンは父親が彼のことを他人の子であると考えていたため、自分の出生は望まれたものではなかったと信じている。彼はマネージャーの美里に出自を尋ねられて、母親が彼を「産まなきゃよかったんだ」ともらしている（図版2、第8巻p.48）。

このように、それぞれのバンドの4人中3人までが問題を抱えた家庭、言い換えるなら、「引き裂かれた」家庭の出身者である。パンク、あるいはロック・グループは、通常これほど親を欠いた家庭の出身者によって構成されているのであろうか。そんなことは「ない」はずである。では、なぜ『NANA』にはこれほど多くの不幸な若者たちが登場するのであろう。

この問題を考える上でヒントとなるのは、引き裂かれているのは、なにも登



図版2 「自らの出生を嫌悪するシン」

(© Yazawa Manga Seisakusyo / Cookie SHUEISHA Inc.)

場人物の家族だけではないということである。物語の進行とともに悲劇の色彩を強める二つ恋愛もまた、「引き裂かれた」魂のドラマとして提示されている。作中でナナはレンと恋愛関係にあり、シンはレイラと愛人関係にあるが、彼女らの自我もまた、理想と現実の間で「引き裂かれた」=揺れ惑う存在として描かれている。

2. 引き裂かれる自我

そこで、まずナナの自我が恋愛においてどのように分裂させられているのかを見て行こう。

王子の到来を夢見る少女マンガの主人公とは異なり、ナナは恋愛成就を人生における最高の価値とは考えていない。レンが東京へ発つことが決まったとき、彼女は彼について行くことを拒む。恋人の出発に際して、ナナは次のように言う。

「だけど、あたしはレンのために／何をしてあげられたら／このままべつに／歌なんか歌えなくなっても／レンと一緒に東京へ行って／レンのために せめて毎日／ごはんを作って部屋を磨いて／レンの子供を産んで／そうする／べきなのかもしれない／それだって／充分すぎる程の／幸せ



図版3 「レンの妻となることを拒むナナ」
(© Yazawa Manga Seisakusyo / Cookie SHUEISHA Inc.)

じゃないか」(第1巻 p.160、図版3)

これは、明らかにシンデレラ・ストーリーとして人生を捉えることの拒否であろう。ナナはここで自分の夢が、恋愛の成就=結婚とは交換不可能であることを表明している。そして、彼女はブラストの仲間達と東京で成功を収めた後もこの意志を貫いている。ただ、ここで注意しておくべきことは、彼女の自我の分裂は、レンとの共同生活が成った後も変わらないということである。実際、二人はスキャンダルを逆手にとって同棲生活を始めるのだが、彼女が仕事を続ける限り二人に平穏が訪れることはない³。レンを海外でのレコーディングに送り出した後、彼女は次のように独白する。

「最後じゃねえのかよ? / でも / 戻ってきても / 同じだと / 思うんだけど」
(第16巻 p.48)

最初のセリフは、二人で朝食を取るのが「最後じゃないのか」という意味であり、後半の「戻ってきても同じだ」というのは、レンが夫然として仕事を終えて海外から帰っても、私は変わっていない=同じ、つまり依然として、レンとの生活のために仕事を捨てるつもりはないと宣言しているのである。一方レンの方は、彼女が自らの夢を捨てることができないことに理解を示しつつも、彼女が常に自分のそばに妻として居ることを望んでいる(第14巻 p.90)。我々は、ここに『NANA』の表面上の過激な意匠とは別に、非常に保守的な少女マンガのイデオロギーを読み取ることが可能であろう。レンに愛されてあるためには、ナナは夢を断念するしかないのである。従って、共同生活が可能になったとしても、歌手としての生活を放棄しない限り、彼女の自我は永遠に理想と現実の間で引き裂かれてあることになる。

同様に、レイラとシンの恋愛も理想と現実の間で引き裂かれた恋人達の物語となっている。レイラは幼馴染のタクミ以外の他人を愛することが不可能であ

3 この意味で『NANA』は一見シンデレラ・ストーリーを拒否しているように見えて、実は非常に保守的な少女マンガだと言える。

ることがわかっていながら、16歳で体売りのシンと恋に落ちる。シンは、彼女がタクミに愛されない孤独を紛らわすために自分を求めていることを知りつつも、レイラとの関係が続ける。しかしながら、彼らの愛に嘘はない。タクミが奈々を選んでいる以上、レイラの恋は永遠に彼とシンの間で引き裂かれたものとなる。

これら二つの例が示していることは、『NANA』に描かれる恋愛の裂帛状態が、いずれも「理想の私」と「現実の私」⁴の間にある軋轢に起因しているということである。このことは、『NANA』が孕む裂帛のテーマが、自我=アイデンティティの二重性と深く結びついていることを示唆するのだが、『NANA』の結構が少女マンガ得意の「分身の物語」の枠組みを取っていることを知るなら、我々は作中に描かれる登場人物たちの選択不可能性の問題を通して、「引き裂かれた子供たち」の問題へとたどり着くことが可能である。と言うのも、少女マンガにおける分身=分裂のテーマは、母と子の問題と密接に結びついているからである。次節では、これら二つ問題系列がどのような関係にあるのかを見ることにする。

3. 少女マンガにおける「分身」の問題

『NANA』が、同じ名前をもち同じマンションに住む同年齢の二人の女性の物語であることは、この作品が『リボンの騎士』（手塚治虫作、1953年～1956年）以来の「分身」（あるいは「双子」）の物語の系譜に属することを示している⁵。

藤本由香里によれば、「初期の双子マンガというのは、なんらかの要因で片方が裕福に、片方がそれとは対照的な環境で育ち、その後に二人がめぐりあってさまざまな事件の後に出生の秘密が明かされ、大団円を迎える、といったパターンが多かった」⁶。しかし、この貧富の差に基づいた対照は、日本が豊かな国にな

4 ナナの場合はレンの妻としての私（理想）と歌手としての私（現実）。レイラの場合は、タクミの恋人である私（理想）とシンの愛人である私（現実）。男性の側も、女性たちの二重の欲望を理解し受け入れていることから、彼女らと同じ二重性にさらされている。

5 主人公のサファイアが男の子の心と女の子の心をもったヒロインであることは言わずもがなのことであろう。

6 藤本由香里「分身——少女マンガの中の『もう一人の私』」in『マンガの社会学』（宮原浩二郎、荻野昌弘編、世界思想社、2001年、p.83）。以下、この論文からの引用は、引用文の後にページ数のみ記す。

るにつれ消滅して行く。日本社会が高度経済成長を達成する過程で、少女マンガから「別れ別れになった双子の物語」という設定は消え去るのだが、「分身」への嗜好は生き残り、内在化される。藤本は言う、

「この頃（1970年代、筆者注）から少女マンガは、あるがままの自分＝「現実の自己」と、理想の自分、ないしは他者の期待を投影され、それに答えようとする自分＝「ありうべき自己」との間の分裂と葛藤というテーマを深化させていく。その時、双子＝分身というのは、それを描き出すための格好の装置として機能した。」(p.88)

これを『NANA』に当てはめるなら、大崎ナナと小松奈々が、性格や人生の目的、育った環境などの点でどれほど異なっていようと⁷、説話論上は二人を独立した個人とみなすことはできない。むしろ、そのコントラスト故に両者は一つの人格の二つの側面を表していると考えられるべきである。従って、『NANA』という作品は、二人のNANAを登場させながら、少女たちに理想の自己と現実の私の二つの人生を生きることを可能にしているのだ。

ところで、こうした理想の自己への憧れは少女マンガ特有の現象であろうか。少年達は「ありうべき自己」への変身を夢見たりはしないのだろうか。少し少年誌を開いてみれば、少年マンガの世界には、地球（又は宇宙）を救うためにスーパーヒーローへと変身する登場人物に満ち溢れている。少年と少女のアイデンティティの違いに関して、藤本は夫となることは、妻となることと「けっして同値ではない」のだと述べ、その違いを次のように指摘している。

「「性」は、少女マンガの中でつねに、「分身」が現れる契機であり続ける。

思春期の少女にとって「女である私」は違和である。だがやがて少女はそのアイデンティティを引き受け（＝「女」になり）、多くの場合、妻になり、

7 先に述べたようにナナは両親のない家庭で育ち、歌手として成功することが生きる目的であるが、奈々は夫婦仲円満な家庭で育てられた子供で、幸せな結婚をすることが人生最大の目的である。

母になっていく。妻になるというのは、自分でありながら同時に他者のアイデンティティにとりかこまれることであり（…）、母になるというのは自分の中に他人を孕み、自分の一部を分離して他人を作り出すことである。

ここに、女性の意識の中に多様な「分身」とか「もう一人の私」が生まれる素地がある。

つまり、女性のアイデンティティというのは、他者の視点を内面化し、つねに他者との関係によって揺れ動くものであり、男性のように一貫したアイデンティティを保ち続けることは難しい。それほど女性の自我の輪郭は曖昧で変化しやすく、だからこそ女性は「分身」とか「もう一人の自分」というテーマにこれほど惹きつけられるのであろう。」(pp.73-74。省略は筆者。以下同様。)

藤本は、少女は少年と異なり、思春期における肉体的変化、そして妊娠を伴う結婚生活という、その性的な身体の変化を通して、自我の二重性を体験するのだと言う。こうした変化によって引き起こされるアイデンティティの不安定さの表現が、「分身」あるいは「もう一人の私」なのだとされる。

確かに、性的・肉体的変化が、少女の心性を少年のそれと異ならせていることは明らかであろう。また、少女が体験する身体的変化が、男がもつアイデンティティとは異質の自己意識を形成することも確かなことであろう。しかし、だからと言って、このことが少女マンガにおける分身＝双子のテーマの特権性を十分に説明しているようには思えない。もしも、少女マンガが複数のアイデンティティを描きたいのなら、少年マンガがやっているように理想の自己（たとえば、王子と結婚するシンデレラ）へと変身する登場人物を創造することによって、アイデンティティの複数性を表現すればよいのではないだろうか。しかし、少し考えてみればわかると思うが、私たちは主人公が超人へと変身する物語を読んでも、自己意識の二重性を感じるなど微塵もない（スーパーマンが自己同一性に不安を感じているようでは、悪を倒すことなどできるはずがない）。つまり、この方法を用いては、アイデンティティの不安定さは表現できないのである。では、分身少女ものの何が「女性」の自我の不安定さ・曖昧さを表現す

るのだろうか。

4. 分身と女の時間

この問題を解明するには⁸、少年マンガにおいて分身がどのように現れるのか、より厳密には、変身がどのように起こっているのか、を知らなければならない。少年マンガのヒーローものを読んでいて気付くことは、当たり前のことだが、スーパーヒーローは変身の後にしか現れないということである⁹。言い換えるなら、超人的な存在は変身以前の凡人としての主人公とは決して同時に存在することはないということである。それに対して、少女マンガの分身は自らの分身と共存するのが普通である。この事実は、夢のレベルにおける少女＝女性の時間意識が、少年＝男性のそれと異なっていることを示唆する。要は「継起性」の問題なのだ。

少女たちがもつ時間意識は、少年たちのそれとは異なり、順序＝順番に拘束されたものではないと考えられる。ジュリア・クリステヴァに拠れば、男性は時間を通常「線的なもの」として捉えているが、女性はそれを「裂け目も割れ目もない」「想像空間のよう」なものとして意識している¹⁰。こうした順番のない・空間のような時間意識の中では、当然のことながら、対立するものの共存が許され、「現実の私」が「理想の私」と同時に存在することが可能となる¹¹。だから

8 上野千鶴子が言うように、「マンガやアニメなど日本のサブカルが、性別非対象的なジェンダー・セグリゲーション（性別隔離）のもとにおかれてきたことは常識である。」（上野千鶴子「腐女子とはだれか？ ―サブカルジェンダー分析のための覚書」in『ユリイカ』2007年6月臨時増刊号「腐女子マンガ体系」、青土社、p.31）従って、日本のマンガやアニメは、しばしば少女・女性と少年・男性間の性差を示す格好の例を提供してくれる。我々は少年マンガを通して男性性の符牒を、そして少女マンガを通して女性のセクシュアリティの特性を見出すことができる。

9 鳥山明の『ドラゴンボール』（1984年～1995年）の例を思い出せば、容易に理解できるであろう。

10 ジュリア・クリステヴァ「女の時間」in『女の時間』（棚沢直子、天野千穂子編訳、勁草書房、1991年）、p.120。初出は、34/44 *Cahiers de Recherche de S.T.D.*, no.5, Université Paris 7, 1979。

この同じ論文の中で、クリステヴァは次のように述べている。

「いずれにせよ、ヨーロッパのフェミニズム運動は、簡単に男性的とされている 文明的、脅迫観念的、線的時間性という概念に対して、三つの態度をとっていることが観察できよう。」（同上書、p.123。下線は筆者）

11 『NANA』が、他の少女マンガと比較しても、とりわけ「女の時間」意識に従って描か

こそ、少女マンガにおいては、ナナと奈々のように分身あるいは双子のヒロインの物語がしばしば語られてきたのである。

そして、こうした時間性は妊娠時の女性の意識と強く結びついている。藤本も指摘しているように、妊娠は女性に胎内の子との関係において自己と他者の共存を強く感じさせる契機である。クリステヴァの言葉を引こう。

「妊娠した女は二分化の試練にさらされます。(…)つまりアイデンティティの限界を絶えず問い続ける二分化です。これは私なのか子どもなのか、私の身体なのか子どもの身体なのか。」¹² (下線は筆者)

この自＝他の融合感覚は、『NANA』を読み解く上で大きな鍵を私達に与えてくれる。と言うのも、この作品は、少女マンガには珍しく妊娠する主人公を登場させた上に、その生々しい子宮の写真まで挿入されているからである(図版4、第8巻p.63)。そして、さらに重要なことは、ナナと奈々が、後者のタクミとの結婚を機に決裂＝分離するまで住んでいた707号室が、まるで子宮を象徴するかのように描かれていることである(図版5、第11巻p.43)。つまり、ナナと奈々が住んでいた部屋が、子宮のイメージで捉えられていると言うことは、二人の存在が単に少女の自我の二重性を表しているというだけではなく、彼女達の関係が、実は母と子の関係と同値であるということを示しているのではないだろうか。

さらに、子どもを懐妊した女性のアイデンティティの境界が、その意識内部において「絶えず問い続け」られているということも忘れてはならない。ナナとレイラの苦しみは、両者共に永遠に続く恋の未決状態にあった¹³。これは、妊

れた作品であることは、重ねられるコマ、過去・現在・未来の時制の交錯、頻繁に挿入されるモノログなど、どこから読み始めたらよいのか一見判断のつかないページ構成に現れている。コマの順番に従って展開する少年マンガを読み慣れた読者にとって、この作品は非常に読み難い作品となっている。また、『NANA』の場合、コマとコマが常に実線で区切られていて、ほとんどコマ同士の間に空間＝間白がないことは、逆に間白によるコマ割りを厳密に守る作品が、男性原理に従って描かれていることを示唆する。

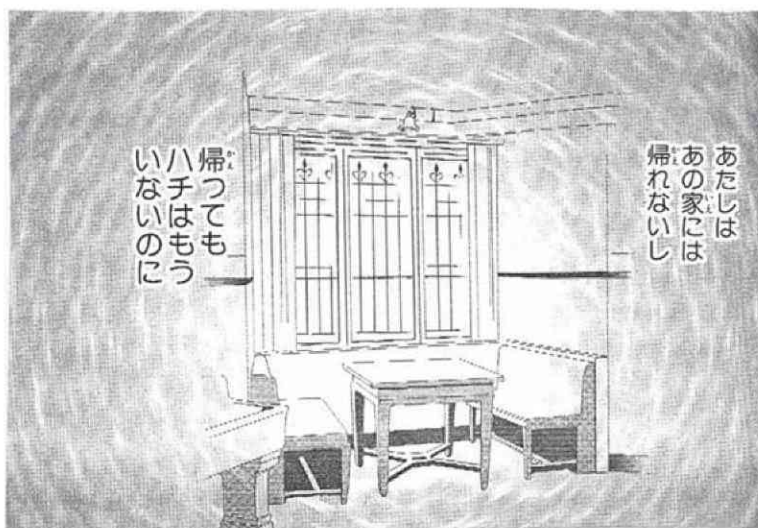
12 クリステヴァ「性の他者」in 同上書、p.111。初出は、『*Sorcière*, no.10, Albatros, 1977。

13 ナナの場合は、レンの妻として家庭に納まるのか、歌手として身を立てるかの二者択一であり、レイラの場合はシンの恋人でありつつ、タクミを愛すること。



図版4 「奈々の子宮の写真」

(© Yazawa Manga Seisakusyo / Cookie SHUEISHA Inc.)



図版5 「ナナと奈々の部屋、707号室」

(© Yazawa Manga Seisakusyo / Cookie SHUEISHA Inc.)

婦の自我意識の曖昧さの形を変えた表現だったと言えよう。

このように、『NANA』に描かれる裂帛のテーマが、常に子宮内における母子の融合＝分離状態にその根源を求めることができるとするなら、冒頭に言及した引き裂かれた家庭を出自とする子ども達の数々の多さも、この観点から解答が求められるべきであろう。

5. 『NANA』と母性の問題

考えてみれば、『NANA』に登場する多くの子供たちは、そもそも母親を欠いた存在であった。ナナもシンもヤスもレンも、物心ついた時には、母親は彼らの傍にはいなかった。タクミの母親もまた彼の高校時代に病死している。レイラの場合のみが少し例外となるが、彼女も母親の愛には恵まれてはいなかった¹⁴。

つまり、ブラストとトラネスの構成メンバーのほとんどは、実の母の愛を知らずに成長した子ども達なのである¹⁵。もちろん、ここに挙げた6人全員が母性的な愛情に恵まれなかったわけではない。ヤスは少年時代に両親を亡くしたとはいえ、慈愛に満ちた養父母に育てられているし、タクミと母の関係は母親が死に至るまで良好なものであったと思われる。ヤスとタクミが精神的にも安定した生活を送り、バンドのメンバーから頼りにされる存在となっていることを考え合わせるなら、そのことは、逆に母性愛の問題がこの作品において重要な要素であることを際立たせていることが理解できよう。そして、ヤスのケースは、血の繋がった母の愛が問題なのではなく、母としての愛＝母性こそが重要視されるべきであることを示している。また、冒頭に引用したナナと母親の別離の場面(図版1参照)が、全巻を通して4度繰り返される¹⁶ことを知るなら、『NANA』の母性へのこだわり、母の愛への希求こそがこの作品を貫くテーマだと言っても過言ではないだろう。

14 第18巻で、彼女の母親はレイラが高校生の時にしばしば男友達と外出していたことが言及されている (p.238)。

15 この意味で、第8巻のp.57でレンが『みなし子ハッチ』(タツノコプロ制作、1970年～71年)のアニメのファンであることは、非常に象徴的である。

16 第1巻p.120、第11巻p.165、第16巻p.143, p.144、第20巻p.142。

今や、引き裂かれた家庭の子供たちが多数登場している理由は明らかであろう。それは単なる設定の偶然などではなく、『NANA』を悲劇¹⁷へと導く原動力となっているものが、ナナと奈々の友情の破綻による後悔の念でもなければ、ましてや恋人を失ったヒロインの悲しみでもなく、母と子が子宮の中で体験する悲痛なる分離の苦しみだったからである。だからこそ、あれほど親を欠いた(=母性に恵まれなかった)子ども達の存在がこの作品には必要だったのである。

(本学准教授)

17 第20巻で、雪の日にナナに会うために車で大阪へ出かけたレンは、壮絶な事故死を遂げる。